

自らの常識に対する疑問：異文化を学ぶ契機——●細見眞也

(北海学園大学教養部教授)

今年も間もなく新学期を迎えるが、私はいつも最初の授業で「リンゴは下に落ちるものだ」という常識に対するニュートンの素朴な疑問が万有引力の法則を発見する契機になったとされる有名な話を取り上げて、学生諸君が自らの常識に疑問を感じるように仕向けることが私の講義の狙いであると説明し、それに向かって試行錯誤を続けている。

私が講義の目標をそのように設定したのは、他でもなく自分自身が今から35年前にアジア経済研究所の海外派遣員としてガーナに滞在していた2年間に、自らの常識を疑わざるを得ないような事態に何度か遭遇し、この体験によって、自分が知りもしないことをあたかも知りつくしているかのように振る舞ってきたという「自らの無知」(プラトンの言葉を借りれば「無知の無知」)を自覚することが出来たように思われるからである。

ココア栽培の実態を見たいと思い、私がガーナの南東部にあるマンボンというココア栽培発祥の地を訪ねたのは1962年10月のことであったが、村の周辺をいくら探し回っても、ココアの畑らしいものを見つけることは出来なかった。そこで通りかかった村人に「ココアの畑はどこにあるのか？」と尋ねたところ、全く意外なことに私の目の前に鬱蒼と茂っている雑木林がココアの畑だと教えられた。

当時の私の目には、ココアの畑がなぜ、無為に放置されている荒蕪地とか雑木林のようにしか見えなかったのか。こうした自問を繰り返すことによって分かったことは、自分が「畑とは一種類の作物が整然と単作されている地片である」という日本の常識に基づいてココアが単作されている畑を探していたのだが、ココアは多種多様な作物や植物と「混作」するのが常識的な栽培法であり、混作こそガーナの伝統的な農法であるという事実であった。つまり、それまでの私には自分の常識に大きな限界があり、常識が通用しない世界があるという事実を知らず、それを自覚するのに必要な経験が欠けていたのである。

そこで私が混作農法をはじめ、無文字性、性別分業、あるいは共同体による土地の保有制度のようなアフリカ社会の常識を取り上げつつ、アフリカではなぜ、そのような常識が形成・維持されてきたのかという疑問を学生諸君に投げかけることにより、彼らが自分の常識に内在する限界を自得してくれることを願いつつ授業している。